

VII. 座談「原爆被災と私の医学生時代」

内藤 芳 篤

原爆の話は亡くなられた調名誉教授から「きみは被爆当時、ここの学生だったのだからなにか書け」とよく言われていたのですが、私としてはあまり自分自身の被爆体験には触れたくない思いで今日まで過ごしてきました。それは原爆というのは非常に腹立たしいのと、悲しいのと、また自分だけ生きていて些かすまなかったという気持からです。被爆者健康手帳にしても、周りの人たちから申請手続きをするようにとだいぶ勧められているのですが、生き残った上に、なんだか申し訳ない気がしていまだもって申請していません……。

〈原爆投下前後のこと〉

私は当時長崎医科大学附属医学専門部の2年生でした。医大のすぐそばの下宿に、その年の4月に移り住んでいました。下宿は老夫婦2人で、そのおじいさんは病身で歩けませんでした。夜に空襲のサイレンが鳴ったらすぐにそのおじいさんを防空壕に抱え入れ、そして解除になったら大学に行っても帰ってきてその方を抱きあげて、家へ戻すというようなことを毎回繰り返していました。

8月になると空襲がいよいよひどくなりました。8月1日空襲があり、私は基礎のキャンパスにいましたが附属病院の産婦人科と外科の各々の手術室（中央システムではなく、当時は各科に手術室を持っていた）がやられて大騒ぎになりました。学生も3名が亡くなりました。夕方になって下宿に帰ってみると、下宿も爆弾でやられていました。裏の崖は崩れ、2階は壊れて床は吹き飛んでいました。

住む所がなくなってしまったので、私は大学の防空当直者が泊まっている武道場に泊まり込みました。大学の道場であれば雨露はしのげだし、毛布もあるし、人がたくさんいるので寂しくなかったのです。

6日には8月1日の爆弾で死亡した3名の慰霊祭がありました。8月8日の夜はいつものようにくたびれて寝ていたら、私の横に医学専門部の学生主事（今の学生部長）の松尾教授（哲学）が来て寝ころびました。いろいろ学生の世話をする立場の人でしたから、「きみの下宿は爆弾でやられたそうだが、今どうしているかね」と聞かれました。ここで寝泊まりしている旨を答えたら、「自分の家族は、全部田舎に疎開して、一人で住んでいるから家に来ないか」と言われました。しかし教授と二人で住むといてもですね……。ありがたかったのですが、一緒に住む気はしなかったので断りました。「それじゃ1週間ばかり休んでよいから、家に帰って、とにかく身の廻りのものを持ってきなさい」と言われました。それが原爆投下の前日、8月8日の夜でした。その夜のうちに、「被災者だから切符を売ってくれ」という証明書を貰いました。この証明書を持っていけば、切符は買えると思いましたが、内心では余り帰りたくはありませんでした。途中、列車は必ずといってよほど攻撃の目標になっているし、大学にいれば友達と一緒にだから何となく怖くない気がしていました。しかし学生主事が証明書まで折角書いて下さったのだし、また実際に生活必需品を持って来ないと不便でもありました。

それで8月9日、朝早く発とうと思って7時15分浦上発の汽車に間に合うよう大学を出ました。

朝の浦上駅は、応召されて行く人達がいるし、よそから動員で来ている学生で、海軍の予備学生の試験を受けに行く人達など、優先的に切符を買える人達がたくさんいて、普通の《被災証明書》を大学から貰って行っても、なかなか順番が廻って来ませんでした。予定よりも大幅に遅れて、10時半頃ようやく切符を買うことができました。しかし汽車は時刻表通りにはなかなかやってくれない。いっそのこと夜行にしようかと思ったのですが、10時50分頃に来た上り列車に乗り込めました。

ちょうど列車が長与駅のホームに入ろうとした時でした。下りの列車とすれちがう時に、瞬間的にピカッと光ったんです。私はてっきり下り列車の機関車が直撃弾をくらったと思いました。そして次の瞬間に真っ暗になってしまいました。ちょうどトンネルの中のようにになって、煙が入って来たような感じがしました。車内が騒然となって、みんなパァーと伏せました。私の乗っている上り列車も爆撃されたと思いました。その一瞬の時に《下宿はやられるし、学生主事が親切にしてくれたのはいいけれど、切符はなかなか手に入らずに11時近くになったし、汽車にやっと乗れたかと思うと爆撃されるし、運が悪いな》と思ってしまいました。そして長与駅前の川べりの土手に逃げて行きました。約20分位して、駅に引きかえし、ふっと空を見たら、今ではよく知られているあの《きのこ雲》があがっていました。「医大はどうだろうか」と駅員に尋ねたら、「いや、あれは西山の山の中だから、医大は大丈夫ですよ」と言うんです。いくにんかの人に聞いてみても、「医大は大丈夫、もう少し先ですよ」ということで、まあそれを

信用するより他はありませんでした。汽車はそれから30分位して再び動き始めました。

ずいぶん長い時間かかって、夜遅く福岡の自宅へ帰りつきました。その時、父は大きなリュックサックにいっぱい物を詰めて、まさに飛び出しそうな格好をしていました。ラジオで長崎に特殊爆弾が落された、長崎市民は全員避難せよと繰り返し放送していたそうです。てっきり特殊爆弾にやられたと思い、父は夜行に乗って私を捜しに行くつもりだったらしいのです。しかし私が帰って来たものだから、大変ビックリしていました。

長崎の現地では私を9日の朝まで見掛けたので、行方不明と記録されていて、生存が確認されてからも記録の抹消がされなかったのでしょうか、ずいぶん後まで福岡の実家に原爆犠牲者慰霊祭の案内が来ていたようです。

日本が先の大戦をはじめたのが12月8日でしたから、毎月8日は大詔奉戴日と称して大学の教職員、学生全員が集まり、学長の訓辞が行なわれていました。原爆投下の前日の8月8日にも全員がグラウンドに集まって角尾学長の訓辞を聞きました。学長は前々日の6日に東京出張の帰途、広島市内の線路を歩いてこられ、そのすさまじい惨状を見ておられたので、訓辞の中で「特殊爆弾（まだ原子爆弾とは呼ばなかった）はすごい、外傷が全然なくて……」という話をされました。そしてそのような爆弾が長崎にも落ちる可能性があるんだということでした。学長は東京出張以来、自宅まで帰りつかないまま附属病院で被爆され、ついに22日に亡くなられました。

私は長崎の惨状を知らないまま翌10日は疲れきって家で寝ていました。1日から9日までにはまともに眠っていなかったのです。翌11日になって、同郷の学生が長崎から息も絶えだえになって帰ってきたとの知らせがありま

した。早速見舞いに行き、はじめて長崎の様子を聞きました。帰ってきた学生は外傷は全然ないのですが、精神的に異常な状態になっておりました。極限の恐怖の中でそのようになったのだらうと思いました。パーッと起き上がったかと思うと、座敷から飛び出して井戸に行き水を飲むんです。そしてまたぐったりして寝ていました。それでも傷は全くないし、その人が死ぬとは思いませんでした。長崎の様子を聞くと、とにかく医大は吹っ飛んだと言い、助かったのは自分1人ではないだらうかとも言っていました。私は直ぐ長崎へ行こうと思い、ようやく12日の福岡廻りの夜行に乗りこみ、13日に長崎にたどり着きました。長崎まで汽車は行かないので、道の尾だったか長与だったか記憶が曖昧ですが、とにかくそこから歩いて浦上一帯にたどり着きました。

13日にはまだ生きている人がたくさんいました。とにかく「水をくれ」と言うのです。水を汲んで帰ってくると、その人は死んでしまっていました。基礎教室は木造だったので全棟が潰滅し、火災の中で死んでいました。基礎のキャンパス内にいて助かったのは、教練用の銃と剣とを収める防空壕を掘っていた附属薬学専門部の学生と教官の6名だったと聞きました。当時は中学校から大学まで軍事教練用の銃と剣とが配られており、《天皇陛下の銃》と称して神聖視されていましたので、これを収める場所として深い壕を掘っていたのでしょう。

亡くなった人を担いで下に降りて行き、正確な場所は今となっては分かりませんが浜口町界限だったと思いますが、焼けてない板切れを集めてベッドのような台をつくり、毎日毎日火葬を行いました。周囲の死体は腐蝕し、追っても追ってもカラスの群がきて肉をつつ

くのです。まさに地獄絵さながらでした。夏の暑い時でしたから学生は上半身裸のうえに白衣を着ていました。だから白衣が破れたり焼けたりしてしまい、焼けただれた皮膚を露出していました。しかしそれでもまだ……。

15日に戦争が終わりました。《終戦、負けた》と聞いて、ガックリなってしまいました。息も絶えだえの人びとが、敗戦と聞いて突然死んでいったのを見ました。

私は8月13日以来、爆心地の近くで火葬をつづけていましたので、8月の終りごろから体調がだんだん悪くなってきました。放射線の影響でしょうか、食べ物がなく栄養不良になってたためでしょうか、よく分かりませんが、やはり放射線の影響だったのでしょうか。はじめ強い下痢があり、血便が出ていました。髪は抜けませんでしたが、歯肉からの出血がひどかったのをおぼえています。私は生来、歯並びがきれい小学生の頃から虫歯予防デーのときにはいつも賞品を貰っていたのです。しかし、原爆をさかいにして歯はガクガクになり、歯並びも非常に悪くなりました。日に日に身体が消耗していくので、そのとき生き残った者が寝泊まりしていた八坂町の寮で寝ていたら、学部4年の人が見かねて「お前はそのまま長崎にいたら死ぬぞ、とにかく福岡の自宅に帰れ」と忠告してくれました。

9月の中旬頃だったのでしょうか、福岡の家に帰り療養していました。医者が往診に来てくれるのですが、《ブドウ糖をさがしてこい》とのことでしたが、当時仲々手に入らず、母が毎晩着物を風呂敷に包んで出掛けました。どこでどのようにしてブドウ糖に代えてもらうのか、翌日うってもらうブドウ糖を持って帰ってきました。長崎に居るときに、放射線科の永井隆先生から「自家輸血が効果がある」と聞いていたので医者に頼んでみましたが、

そのような治療はしてくれませんでした。

〈被爆後の授業再開〉

11月になって新聞に、《長崎医科大学の学生、教職員全員、大村の海軍病院に集まれ》との公示が出ました。とにかく生き残った者は全員集まりました。髪が抜けた者、死んだと思っていたら生きていた者などお互い無事を確かめ合いました。先生たちも生き残った人たちの他に、早く復員して来られた人たちがいて、ほとんどが軍服を着て軍靴をはいていました。当時の大村海軍病院は新しい木造の建物が並んでいました。一番奥の13棟を使用するようになっており、1階の大部屋が学生用の宿舎、2人部屋と個室が先生たちの部屋に割り当てられました。同じ間取りの2階大部屋が急造の講義室、2人部屋と個室が医局や教官室に使用されることになりました。講義は学部4年、3年、2年と医学専門部の3年、2年合同という不思議な形態でした。解剖学の講義があるかと思えば、次は皮膚科の臨床講義があり、白衣を着た先生が講義をされた次の時間は、軍服姿の復員してきた先生が講義をされたりしました。そんな日が約2ヶ月続いて正月の休みに入り、1月からはとにかくクラス別に講義が行なわれるようになりました。1年生は大変気の毒でした。学部学生は4月に入学したのですが、医学専門部学生は動員で工場に行っていたため、7月に入学して間もなく被爆したわけです。学部も医専も1年生はほとんど講義らしい講義は受けてないので、九大医学部に預けられ、1年次が終ってから長崎へ帰って来たようでした。

〈混乱期の医専廃校〉

大村には翌昭和21年4月ごろまでいました。

一応、2年終了の試験もありましたが5月ごろから諫早（現在の健康保健諫早総合病院）に移りました。私は医専の3年生になり、1年間授業を受けたわけですが、秋ごろだったでしょうか全国の医科系の学校を審査して教育に不適当な処は廃校にするという話が伝わってきました。

当時、医師を養成する学校としては大学医学部および医科大学（いずれも旧制高校卒業生あるいは大学予科終了者が入学、4年課程）と、医学専門学校および大学医学部・医科大学の附属医学専門部（いずれも旧制中学卒業生が入学、4年課程であったが、5年課程をとっている所もあった）という二つのコースがありました。はじめに医学専門学校・附属医学専門部の審査を行い、次いで大学医学部・医科大学の審査を行うということでした。結局、大学の方の審査はありませんでしたが……。

医学専門学校・附属医学専門部を審査して、その結果によりAクラス、Bクラスに分ける。Aクラスは5年課程に改めて、存続させる。Bクラスは廃校とし、在校生はAクラスの学校へ1年学年を下して編入させるというものでした。戦争も末期の昭和18年、19年ごろ、軍医養成を目的に医学専門学校が急増していた（現在の新八）。ほとんど戦災を受けていたというよりも、はじめから小学校の一部を借りたり、県立病院に間借りしたりして開校しており、大部分が廃校になるのではないかとの噂もとんでいました。原爆で校舎、器械類そして多くの教官を亡くしていた長崎医科大学は、Aクラスには……ということで附属医専の学生は動揺しました。しかし大学は全然慌てる様子はないので、心配した学生代表が何度か教授の人たちに相談に行きました。すべてのんびりしていることは昔も今も同じで、

そんな審査があることもよく知らない教官がいました。またある教授は、「ここは医科大学につくっている医専だから審査にパスしないことはないよ。そんなことを心配しないで、おとなしく勉強せよ」と叱りつけた人もありました。そして昭和22年はじめ頃、アメリカと日本の専門家からなる委員の先生たちが調査にやってきました。

私はたまたま休暇が終って長崎へ向かう列車の中で、長崎へ審査に来られていた大阪大学の木下教授と一緒にになりました。木下教授は列車の中で私の所にやって来て、「君は長崎医科大学の学生だろう。明日君達の学校を見せてもらうため行っているところだ」と話しかけてくれました。木下教授の堂々たる姿と、指に大きな指輪をはめておられたのを妙に感心して眺めました。そして角尾学長を《角尾くん》と呼んでいました。「角尾くんの家族はどうしているかね、時間があったら見舞いたい」とか言っておられました。鈍行の汽車にうんざりされて、「長崎は遠いなァ」と何度か繰り返しながら、大きなリュックからみかん2個をとり出して、「君も食べたまえ」と1個もらったことをおぼえています。夜遅く諫早駅に着きました。《誰も迎えにきていない》寒い諫早駅でした。

《なんだ、誰も来ていないじゃないか》というような顔をされた木下教授を、どこへ連れて行ったらよいのか迷いました。噂に伝え聞いていたところでは、どこの学校も日米の偉い先生方を丁寧に迎え、とくにアメリカ人の接待は大変だとのことでした。私がおそのとき考えたのは、自分の下宿に案内しようか、それとも調先生の家へ案内しようかということでした。医科大学と附属病院に使用されていた現在の健康保健諫早総合病院は、旧海軍の病院に使われていた処でしたが、当時の建

て物はひどいものでした。その構内に、いく棟かの長屋があり、多くの先生たちはそこに住んでおられました。正門を入れて直ぐのところには院長宿舎と称する平屋建てが一軒ありました。附属病院長の職に在った調先生がそこに住んでおられたのです。

私は当時、大村の正法寺に寄宿していましたので、調先生のお宅から再び諫早駅に引き返しましたが、そこに生化学の頼尊（よりのたか）教授がおられて、「木下教授を迎えに来たのだが……」と言われました。「たった今、調先生の家へ案内しました」と話したら非常に慌てられて、走って行かれたのを覚えています。

その翌日に審査が行なわれました。病院の汚い廊下を、日米の偉い先生たちが通られる姿を学生は不安な気持ちで眺めていました。それでもまだ大学当局は、附属医専がダメになるということには気付いていないようでした。そして3月に試験も終り、休みに入りました。

〈附属医専の廃校〉

昭和22年の3月31日だったと思いますが、福岡県八女郡の田舎に帰省していて、新聞でBクラスと判定された学校の名前を知りました。全国で4校か5校だったと思いますが、国立では長崎のみで、他のBクラス校は戦争の終り頃に急造された学校のみでした。私は慌てて諫早へ戻って来ました。ビックリした医専の学生は学校に集まっていました。ピラ一枚貼っても占領軍に逮捕される時代でしたから、抗議などまったく出来ませんでした。古屋野学長が説明に出てくれました。学生と父兄を前にして、「占領軍の命令だからどうにもならんのだ。君たちがいま騒いだら、医科大学全体の復興も出来なくなってしまう。」ということでした。学生は「医科大学の復興

のためには、233名の医専の学生はどうなってもよいということだろうか。」と執拗に迫りました。また父兄の一人は「原爆で被害を受けて、いろいろと苦勞があることは分かるし、自分もここの卒業生だから医大の復興を願っているが、だからといって附属医専の審査に際して何の対策もたてず、また今後のことについても何の努力も見られない。占領軍命令でどうにもならないならば、せめて他の学校に全員転入学ができるよう文部省に交渉すべきではないか。強く抗議する！……」等々、延々と続きましたが、学生もだんだんと絶望感みたいな空気になっていきました。しかし古屋野学長がただ一人で説明を続けられ、苦渋に満ちた顔に、「学長はやはり悩んでいられるのだろうか」という感じを与えたことも確かでした。

大学をあてにしていなくてもどうにも仕様がなれないと思いながら、教授をはじめ教官の人たちの反応が私には一番興味がありました。全く他人事のように逃げ廻った人たち、口先きだけは同情してくれた人たち、そして本気で学生のために転校先などを心配してくれた人たち、このような3種類に分けられたでしょう。ひどい人になると、「医専の教育ができぬというのだから、学部の審査もパスする筈がない。自分も早く職をさがしたい。君たちと同じ運命だよ。」と公言した教授もあったし、「これでみんな復興に真剣になるだろうから刺激剤として有効だったのではないか」などとマジメな顔をして言った教授もありました。当時、占領軍を非難するようなことを言うことはかなりの勇気が必要でしたからそれがコワイのか、あるいは自分の就職の方が気になっていたのか、どの教授も本気では相談にのってもらえませんでした。そのことはとても淋しいことでした。

しかし路頭に迷っている学生のために、一生懸命やって下さった教授もありました。忘れられないのは、薬理学の中沢与四郎教授です。教授は原爆後に京都大学から来任された先生で、当時40歳代の前半ではなかったかと思います。元気な、そしてコワイ先生でした。廃校が決って数日後、10名ばかりの学生が《中沢教授に相談してみよう》ということで、教授長屋にお訪ねしました。日頃コワイ先生だったので、門前払いを喰うかも知れないと思いながら行ったのですが、狭い家の中に、「上がれ、上がれ」と言って迎えていただきました。そしてその時言われたことは、「附属医専だから無関心だったのではないのだ。大学自体が、組織体としての機能を失っているのだ。審査があるならばそれ相応の準備をし、復興計画をちゃんと示して、教育ができることを説明すべきだ。そうすれば医科大学の附属医専をBクラスに判定する筈はない。また審査委員がいつ到着するかも知れない。阪大の木下教授の如きは、夜中に諫早駅に着いて、学生が自分の下宿に連れてゆこうかと迷った末に調教授の処へ案内したそうだ。」さらに「いま僕が古屋野学長に話して、教授全員で縁故のある学校への転入希望者をそれぞれ引率して行き、是非受け入れてくれるよう交渉することになった。僕が京都大学の附属医専希望者を連れてゆく。医学部長に直接交渉して、全員入れてくれるように頑張ってみる。」顔を紅潮させながら、首を振って話される中沢教授の言葉に、一緒に行った学生は感動しました。こんな教授が長崎医大にもおられたのかと思いました。20歳前後の私たち全員が涙を流しました。

当時どこの学校も、朝鮮、台湾、満州等から引き揚げてきた学生が転入学しており、定員をオーバーしていました。同情して、何と

かしたいがどうにもならないというのが実情でした。例えば、私たちのクラスは3年を終了していたのですが、他の学校でもう一度3年の課程を受けねばならないのです。しかし定員をオーバーしており、もう一学年落ちて2年生にという学校もあり、またそのクラスも定員をオーバーしているので、すでに募集が打ち切られていた医学専門部（校）であったが、とくに一クラス作って1年生に入れるという処もありました。私は岡山医大の附属医専に転入学を希望しました。細菌学の青木教授が引率者でした。試験の前に私たちを集めて青木教授が注意されたことは、「どのクラスも定員をオーバーしているが、できるだけことはしたいとの有難い言葉だった。どのクラスでもよいから《是非入りたい》とってもらいたい。野に下るなどとは冗談でも言わぬように」とのことでした。入学許可の通知を後日受取りましたが、私は行きませんでした。

私は元来子供のときから《歴史の先生になりたい》というのが希望だったので、高校の文科に入り直したいと考えたのです。しかし廃校が決まったのは3月31日で、すでにその年の入学試験は終わっており、もう1年浪人しなければなりません。また当時の経済事情はきびしくインフレの時代でしたから、もう1年浪人して再出発することは到底不可能な状態でした。あれこれ迷っているとき、長崎医大の中に、医専の学生の救済ということもあったのでしょうか、旧制長崎高等学校ができるということを外科の木戸利一先生（大学の助教授、医専教授）から聞きました。木戸先生は、「ここ数年のうちに新制大学に移行することは間違いない。総合大学になるのか、単科大学のままかは分からないが、一般教育を担当できる教授、助教授になれる人が長崎に

はきわめて少ない。外地から引き揚げて来られた先生、海兵、陸士等の教授だった人たちが何処かにいて貰わないと、新制度の大学もできないかも知れないのだ。医専の学生の救済ということではなくて、新制大学設立のために必要なんだ」ということでした。

私は、結局、昭和22年6月に開校された長崎高校理科2年に編入学することになりました。

〈後日談も混じえて〉

医専廃校から20余年も経ってからの後日談ですが、さきほどお話ししました中沢教授の退官の際のことです。先生は脳卒中の後遺症のため最終講義をとくに行なわれず、教授会の終了後、名誉教授の先生たちも加わって中沢教授の長崎へ赴任された当時の思い出を聞く会がありました。そのとき当時の古屋野学長も出席されていました。中沢教授の話の後で古屋野先生がとくに発言を求められて、いくつかの思い出話をされました。その中で昭和22年3月の医専の廃校に触れられました。そして最後に、「自分は酒を飲まないが格別不都合を感じたことはなかった。ただ生涯の中で一度だけ酒を飲まないために味わった痛恨事がある。それは医専の視察に来た委員の先生たちと、一緒に酒を飲まなかったことだ。」と言われ、医専廃校時に学生や父兄の前で見せられた苦渋に満ちた顔をされました。委員の接待が拙くて審査結果が悪かったとは思いたくないけれども、敗戦後の混とんたる世相のなかではそんなこともあったのでしょうか。

はじめに申しあげましたように原爆のことには余り触れたくない気持と共に、医専の廃校にも触れたくない気持で現在まで過ごしてきました。しかし私は末席を占める者であっても、一人の教官として、《学生が困ってい

るときに、逃げ廻るようなことだけはしないぞ》と思いながら今日まで過ごしてきました。

〔内藤先生は原爆投下時当時は学生で、長崎医科大学附属医学専門部に在籍されていた。被爆直後の大学の混乱状態、医学専門部廃校のいきさつ、さらに長崎高校から長崎医科大学への再入学など、学生当時の内藤先生の体験を平成3年3月27日魚太橋に於いて語っていただき、その内容をもとに、文章にさせていただいた。〕

【内藤芳篤先生の略歴】

昭和28年3月 長崎医科大学卒業

昭和29年6月 長崎大学助手

昭和32年4月 長崎大学講師

昭和34年2月 長崎大学助教授

昭和45年7月 長崎大学教授

(解剖学第二講座)

昭和63年～平成2年 医学部長

平成3年3月 定年退官

平成3年5月 長崎大学名誉教授